

〈第29回学会大会 講演録〉

メディアとスポーツ、今までとこれから
見せるためのスポーツ映像の変遷

西田 善夫

The Historical Transition in Olympic Broadcasting


Yoshio NISHIDA

「今までとこれから」というんで、「今まで」の話ですとたいがい反省を求められるんですが、メディアの出す映像とはどういうものか、ちょっと皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

ここにテレビ映像を出せれば「これはこーだあーだ」と言っていけるんですが、それはより専門的でありませし、やや反省会的なものがありますから皆さんのイメージの中で、メディアがどういうふうには放送を伝えているのかを考えて頂きたいと思います。

まずバレーボール放送。世界のワールドカップというのは、日本とどこかというのしか放送してないんですね。これは全くひどい話で、その試合がワーワー騒いでアナウンサーが叫んで、ライズマンが日本のスパイクを目の前に落ちたのをアウトだと言いますと「何で旗を上げたんだ。日本人かそれでも」という放送になってきまして、「あー、これがヒトラーが出てくる元になるんだなあ」これはファッショ放送と私は考えております。と言いますのは、これは一つのショーなんですね。そして日本に得点が入ると、その時に映るのがタレントでして、別に私が知らないタレントだからと言ってひがむわけではないんですが、何を伝えるかということをよく考えてみますと、あれはワールドカップを伝えているんじゃないんですね。日本の男子バレーボールで、加藤君だとかなんかかっこいい人を

伝えてるんですね。これだったら別にバレーは道具にしか過ぎない。

 放送がきたら危ないと考えた1932年ロス五輪

じゃあスポーツ放送って何なんだろうかということを考えてみますと映像というものは随分変わってきていますが、何を伝えるかってことをオリンピックでいえば、オリンピックの放送というのはですね、1932年に始まりました。昭和7年です。私でさえ生まれてない時代で、67年前ってことになるんですかね。この年にロサンゼルスでオリンピックがありました。ロサンゼルスが遠いと思うか近いと思うかは、これは皆さんの旅行経験によると思いますが、これは明らかに日本には近いんですね。アメリカに渡ってから延々大陸横断の列車で行かなくちゃいけない。そんな遠い所まで行ってわざわざやるほどのことはない。「オリンピックってのはヨーロッパでやってくればいいんだ」。そういう考え方から、ほとんど参加が半減してしまいました。さあ、日本の放送にとって当然ラジオです、当時は。これほど有り難いことはないんですね。水の上ほど電波は通りやすいものはないんです。怖いのは山なんですね。衛星と違いますから。太平洋ですから出力さえ出しとけば海の上で音が来る。そこで初めて放送をす

るということになりました。アナウンサーが3人。エンジニアが1人。プロデューサーが1人。ぜんぶで5人。半月かかってアメリカ行ったっていいですから、14日間船に乗ってたわけですね。当時ですね、給与がほしい月に10円だか20円ぐらいの時に、出張旅費が千円くらいだったんですって。それをもらって出て行ったわけですよ。もらって出て行った時にはたいがい皆半分ぐらいに減ってるんですね。準備金と称しているんなものに払ったりなんかしてるんですから。

さあ、向こうへ渡りました。ハリウッドに近いんですね。そこで映像が出てくるんです。1932年というのはトーキーが始まった年です。トーキーなんて聞いたってわからないかもしれないんですが、要するに映画で音が出る。昔は映画というのは音が無かったんですよ。テレビで消音というボタンを押して見てるのと同じだったんです。そこに音が出てきた。ですからよく弁士っていますね。映画を映しながら「太郎さん、私はあなたを」なんていう台詞を言って、演技をさせていたんですね。声優がいたわけです。これがハリウッドで音が出るようになったものですから、ハリウッドはもうすごい勢いですからね。そのロサンゼルスに集まった。当時ロサンゼルスってのはすごい暑い所で駅馬車が走ってると思ってるといふような人がいっぱいいたわけですから、すごい早くから来てるわけですよ。その選手の映像をトーキーで撮って、これをヨーロッパに送ったわけです。皆びっくりしたわけですよ。陸上の選手だと水泳の選手の名前は知ってるわけですね。それがオリンピックのロサンゼルスの会場、今のスタジアムと同じです（皆さんが覚えているのは1984年、14年前ですからちょっと覚えてないかな）。とにかくロサンゼルスオリンピックのあの開会式の時に、あの宇宙服を着たのがピューッと上へ上がって行った、あの開会式のあのスタジアムを背景にしてですよ「私達この頃調子がいいのよ」とかですね「元気になってきたのよ」とかなんとかって女性が喋ったりするわけですよ。水泳のプールの脇で。それがニューヨークで、パリで、ロンドンで、映画館で出るわけですね。すごい人気になっちゃったんです。

日本もオリンピックが始まる前から座談会なんてのがありましてね。番組表見ると午後0時から放送があるんですね。30分あるんです、向こうから。でもこれは面白いんです。当時ラジオというのは、今のテレビよりももっと大事にされてたんですね。結局お昼にな

るとラジオの前に皆集まって、食事をしながらラジオを聴くんですよ。家族で聴いたり、職場で聴いたり。お昼というのはゴールデンタイム。その時に「どうですか。誰々さん調子がいいですか」。なんとかというアナウンサーの座談会を聴く。

その一方、ヨーロッパでは映像を見る。この映像でオリンピック人気が高まった時に、オリンピックの組織委員会が慌てたんですね。こんなに人気が高まっちゃったらオリンピックを見に来ないと考えたんです。特にせっかくロサンゼルスだとかサンフランシスコのその周辺の間人が来なくなる。あとでフィルムで見ればいいんだし。それからラジオですけど、実況放送が始まったら誰も見に来ない、キップが売れなくなるといったんですね。そこが分かれ目なんです。

放送というものをオリンピックの為に使おうとして成功したのがサマランチですね。その一方、放送が来たら危ないと思ったのがロサンゼルスの組織委員会だったのです。

やがてロサンゼルスでもう一回開かれた1984年の時には、ユベロスという人がオリンピックをガラッと変えてしまう。スポンサーシップという制度を考えましたけども、随分同じロサンゼルスでも違ったんです。そして実況放送ができなくなっちゃったんです。さあ大変ですよ。もうもらった旅費の千円の内、半分ぐらいは使っちゃってるんですからね。放送しないで帰ったら大変です。家を売らなくちゃいけないとかね。そこで考えたんですね。実感放送。始めは実感の“感”というのは実際に見る観劇の“観”。“実”は実際の“実”。実観放送。今、実感放送と言うと実際に感じるって書くでしょうけどね。これはですね、アナウンサーが現地に行く。それでレースを見るわけです。メモをする。それで帰って来ましてですね、ロサンゼルスホープストリート十番街（今は全く跡形ありません）の放送局へ行く。1階が自動車のショールームだったっていうんですから小さな放送局だったんでしょう。その2階だか3階にスタジオがあって、そこへ帰って来て実観放送をやるわけですよ。陸上100mで日本は決勝に出たんですよ。吉岡隆徳という人が出まして、当時の世界記録が10秒2だか3なんです、タイ記録もつこの人のロケットスタートなんです、松内則三さんという名アナウンサーが、やがて皆も聞くようになると思うんですが早慶戦の放送をした時に、「神宮の森に帰るカラスが2羽3羽」といって、それが名放送

となったんです。野球放送をやって、カラスの放送して有名になったのはこの人しかいないんです（笑）。この松内則三さんが100mを担当した。吉岡隆徳のスタートは速いですから、ドーッと飛び出す。30mまでトップ。40mでつかまる。50mで消える。60mから後はうしろの方を走るという形なんです、やっぱり「吉岡トップ、吉岡トップ、吉岡トップ」ってのをやっぱり言いたいんですよね。それを喋る。やがて吉岡がつかまる。メトカルフ選手が優勝するんですが、すごい争いをするんです。別な選手ですよ。吉岡隆徳さんそこで置かれて。で、60m以降ずっと放送する。優勝タイム10秒3でしたが、放送時間は1分5秒かかったんですからね（笑）。これはね、映像としてもものすごく面白い。私その映像見ました。映像というのは要するにフィルム。当時は8コースです。8コースですが、1コースと8コースは使わないようにしています。これは第8コースを使わないのは別として、1コースは使わないというのはわかりますね。中長距離の場合1コースを走りますからスパイクの跡が着いてしまう。ですからハンディキャップがあるから2コースからやる。そこで吉岡さんね、スタート凄いんです。バーンと出るんですね。それで「吉岡トップ、吉岡トップ」というのを言い過ぎたんですな、おそらく松内則三さんは。で、1分5秒かかる。でもそれは情報として凄い大事な事なんです。これが映像とそういった音声の単なる笑い話で終わらないところなんです。

はじめてのオリンピック実況放送1936年ベルリン五輪

さあ、4年経った。今度は初めて実況放送ができました。1936年ベルリンオリンピック。これはどういう映像か。200m女子平泳ぎ決勝。前畑秀子さんという人が頑張るんです。で、勝つんです。これは150m折り返したところから、河西三省^{カサイサンセイ}というロスアンゼルスにも行ったアナウンサーですが、そのアナウンサーは「前畑頑張れ、前畑頑張れ、前畑リード、前畑リード、前畑頑張れ」っていうのを22回言うんです（笑）。50mの間に22回ってのは大変なことなんです。それでゴールインして、その時に「前畑勝った、前畑勝った」って14回言うんですね（笑）。それでですね、その回数がクイズに出たこともあるんです（笑）。しかしこれは非常に大事なことです。それが一番の情報だったんです。これは事情を言いますと、ベルリンの夜

中の放送なんです。当時、0時を過ぎてから電波を使ってはいけないという通信法があってNHKの放送も0時になったら終わらなくちゃいけない。それを河西さんは知っているものですから、レースが0時にかかるものですから「切らないでください。切らないでください」と言ってるわけです。要するに内部的な情報も全部言っちゃうわけですよ。飛行機が離陸する前にスチュワーデスがなんかを切り換えろって連絡するでしょ。飛行機の中で。あれと同じです。要するにそれをやってるんです。「切らないでください。切らないでください」と言っという「前畑頑張れ、前畑頑張れ」とやるわけです。ですから、その情報が届いてるかどうか確認できないわけですね。そして当時のシューツシューツというウェービング。その電波の波でよく聞こえないケースがある。そこで彼は「前畑リード、前畑リード」って。そこで情報というものをどういうふうに伝えていくか。言葉だとか映像だってことじゃなくて、情報を伝えるポイントというところがあるんですね。

さあ、ガラッと変わりました。今度はオリンピック映像。なかでもテレビのオリンピックというのは1956年のメルボルンオリンピックの時で、メルボルンのABC、オーストラリアンブロードキャスティングコーポレーション。これが放送していますけども、日本はそれは受け入れていません。日本は1953年にテレビ放送が始まりましたが、その時はラジオの放送だけでした。そして1960年にローマのオリンピックがありました。その時に「ライ、ライ」とよく言うんですが決して麦の話じゃないんで、これはイタリア放送協会というのがありまして、これがテレビ映像を作りました。日本は現地でもビデオを撮りまして、私はもうNHKに入りましたが、地方局にまだ勤務しておりました。そのビデオを空輸するわけです。そして日本に2日遅れ、或いは3日遅れで放送を出すわけです。そういう放送で始まりました。これはなぜそういうふうに2日遅れでもやったかと言うと、1964年に東京オリンピックが決まっていたからです。生放送はありませんでした。まだ繋がってないんです。衛星も何もね。

1960年代のオリンピックの映像

そして1964年にこれは画期的な事なんです、初めてスポーツの映像が生でアメリカに伝わるんですね。その1年前の1963年の11月23日に初めて衛星が繋がったんです。その最初のニュースというのは、ケネディ

の暗殺ですね。東京新聞の前田特派員が、「現地から日本の皆さんにお伝えする最初のニュースがこんな悲しいニュースです」と言って始まったのです。これは素晴らしい放送でした。私、生で見てまして本当に震えるような、アメリカが近くなったということよりも世界が近くなったってのを感じました。と同時に、私は札幌にいてスポーツもやるアナウンサーでしたけども、これは凄い事だと。これはもうスポーツは凄くなるぞと感じましたね。

そして翌年、東京オリンピックの時にアメリカに生放送がいきました。そしてアメリカは朝でした。その時に、アメリカのアナウンサーがNHKのスタジオで何と言ったか。「アメリカの皆さん、こんにちわって言うていいんでしょうか。おはようございますが正しいんでしょうか」と言ったというんですね。それがユーモアだと言われる。要するに、時代によって中身というか人のフィーリングというか会話というのはどんどん変わっていくわけですね。そこでオリンピックはスタートしました。

しかしオリンピックは1つの放送局しか放送しないんです。というのは要するに、国内で映像を作るのは1つなんです。ですから国内でもある時は民放少し加わってましたけど、NHKが主体になりまして映像を作った。それを世界に送るんです。世界に送るというのは作り手は、公平性が無くちゃいけません。ですから水泳のパターンなんて決まってるんです。まず、1位がゴールインする。2位がゴールインする。3位がゴールインする。そして全体がゴールインすると、1位に寄る。その後、引いて2位3位を入れる。3位が8コースなんてんだと大変ですよ。カメラをグーッと引かなくちゃいけない。そしてその後もう一度、1位に寄ると1位が隣と握手してる。全部そのパターンです。これは当然物足りなさが出てきますね。当時日本は水泳があまり1位になりませんでしたけども、私はミュンヘから田口信教という選手が優勝するシーン、当時日本が16年ぶりにテレビの世界で水泳で金メダル取ったのはそれが最初ですが、その映像を放送してました。やっぱり田口にいきたいんですよ。田口を見たいんですけども、カメラが素人のズームみたいに行ったり来たりしてるだけです（笑）。

ここで出てきたのが、自国取材の希望です。やっぱり見たい。私達が考える「見たい」と、アメリカは違うんです。日本は、我々は「見せたいじゃないか」と

いう話をする。そうすると「オリンピックの約束事で駄目なんだよ」とプロデューサーが答える。すると皆が「そうなんだ」とわかる。しかしアメリカは「オリンピックの映像を変えようじゃないか」と言う。それは世界に共通するもんだ。「いや、アメリカだけの映像を作ろうじゃないか」ということになる。じゃあその為は何をするかということのわかったIOCは何をしたかということ、その分だけ取材費を出せということになる。そこで1968年のメキシコオリンピックというのは、アメリカのレポーターやカメラマンがトラックにいるんですね。そしてゴールインした選手が、こうやって帰って来ますとそこへ行くんです。カメラマン、そしてアナウンサーが行ってインタビューするという。これはもう、我々が考えてもめっちゃくちゃな事をやるわけです。ですから陸上の黒人選手たちが表彰台の上で星条旗に向かって右手を上げて抗議した時にでも、アメリカは堂々とそれをアップで映っちゃうわけですよ。要するにありのままを映すようになってしまったんです。これは素晴らしい事です。ある面では。しかしこの時は、やっぱり現場の考えている「駄目だ」と言われれば「ハイ、駄目ですね」となってしまう。それをアメリカは何で切り開いていったかということ、アイデアというものとそれを支える見たいという気持ち。見せたいという気持ちともう1つはそれをバックアップする財力ですね。この辺に映像そのものが変わっていく放送権力というものが出てくる。これは映像の自由化。取材の自由化ということがありますね。

経済、政治、そして国際問題…

そしてオリンピックというのは圧倒的にベンが有利でした。ベンが有利でしたけども、テレビがやがて放送権料を取るようになる。1972年のミュンヘンオリンピックの時に私は、男子のバレーボールの中継をしましたけども、放送席は一番上でした。そして私達の何列か前の放送席に新聞記者席がありました。ですから、プレスアンドTVだったんです。これがやがて1976年のインスブルックのオリンピックの時にアイスホッケーの会場に行くと、私は、冬はアイスホッケーが主に担当だったものですから、会場に行くと愕然としました。テレビが前にありましたね。そしてその後ろにプレスがありました。これはアイスホッケーは全体を上から見た方が見やすいのですが、テレビ優遇というように変わってきました。これはお金を払うから

なんですわね。

そして何と言ってもオリンピックは赤字だったんです。1976年のモントリオールオリンピックというのは映像的にも素晴らしいオリンピックでしたし、カナダの放送局がいろいろ知恵を絞ってました。カナダの放送局というのはアイスホッケーという速いスポーツをやっていますから、映像的な処理は素晴らしいんです。私は今でも覚えています、アップの映像というのは、女子バレーが白井貴子という182cmの女子の選手がいて、この選手がスパイクを決めて最後ソビエトに勝つんですわ。第1セット、第2セット日本が取って、第3セットは10対0ですよ。途中。私は不遜にも女子のバレーボールというのは、オリンピックにはまだ早すぎる。世界がもっと力を揃えてこそオリンピックの種目だということを言ってるんですわ。それ以来日本は金メダルは全く関係なくなりましたが、これは天罰だと私は諦めているんですが、それくらい強かった。そして14対2。その時にですわ、白井選手がバーン。松田選手がセットアップうまいんですわ。バレーボールは名前付けるのがうまいんですが、ひかり攻撃とか言っていますが、それはもうひかりどころかだまでも在来線でも勝てるような試合だったんですがね。私ね、そういう言葉を使うの大っ嫌いなんです、放送で。バレーというのはね、松平さんの解説のように巡洋艦だ戦艦だっていても昔の海軍の話しがわかる人は40才以上の人ばかりなんですわね。それよりバレーのちゃんとしたAクイック、Bクイックってあるけど、それだって私は絶対に使うまいと思ってやりました。確かにその時にビューッと上げた、言ってみればAクイックですよ。それをポッと上げた時に決めた。決まった時に「決まったーっ」って叫んでるんですわね。私も絶叫はできないタイプなんですわ「スパイク決まったー」って言ってその次の瞬間カナダの撮った映像はなんと白井のアップですよ。そしたら白井さんはニコッと笑ったんです。あまり人の事言えないんですが、白井さんというのは笑うと目が無くなっちゃうんですよ（笑）。線引いたような目になっちゃったんです。私思わず「泣かない優勝です」って言ってるんですよ。そしてその後ニコッと笑ったんですわ。他の選手がつかれて笑ったんです。笑ってドーッと集まった時に「泣かない優勝です。笑顔のある優勝です」と言ったの覚えてますわね。そして集まって、控えの選手が来たんです。この控えの選手というのがミソなんですわね。

10対0でしたから山田監督は安心しちゃって「もうこれが終わったら結婚する」とか「これが終わったら日立を辞める」とかいつている選手を順番に出すんですよ。ここが監督の温情なんです。だからどっちかと言うと、金メダル本当にもらう人はベンチの方に座ってたんですわ。それがきたもんですから、ベンチにいた人間が「ありがとう」という感じで抱き合った時にワーツと皆泣き出すんですわ。この変換の素晴らしさ。そしてまたそれを映すカメラの素晴らしさ。私はやっぱり「あー、アイスホッケーのような速いスポーツをやると違うな」と思いましたわね。

映像が変えたオリンピック

そして80年。この時にモスクワオリンピックの問題がありました。この時にそれまでの日本教育テレビがテレビ朝日という放送局に変わるところだったんです。これは名称変更するんで、アイデアを、知名度がほしかったんですわ。日本の放送局というのはモントリオールの時から民放とNHKと一緒にやりましたから、今度も一緒にやれば大丈夫だと思ったんです。ところがモスクワはよく考えてました。一本釣りで始まったんです。それでテレビ朝日は一本釣りに乗って、独占してしまっただけです。これまで日本の放送権料というのはだいたい10億ぐらいだったのが、一挙に30億を超えたんですわ。そしてテレビ朝日が独占することになりました。私達も悔しいですけども放送できません。

ただその年の冬のオリンピックがアメリカのレイクプラシッドでありまして、ジミー・カーター大統領だったんですが、その1カ月前にアフガニスタンにソビエトが侵攻したんです。国際問題やってる人はわかるかもしれませんが、これはアフガニスタンというのはソビエトのベトナム戦争と言われました。「ソビエトはアフガニスタンから帰れ」。カーターが言ったんです。「帰らなければモスクワオリンピックをボイコットするぞ」ということを、何とレイクプラシッドというアメリカのニューヨーク州の外れにある寒い、人口全部合わせて2,200人という村の開会式。それはもういっぱい集まっていますから、賑やかな開会式。そこで、開会の前日に発表したんです。私はそれを中継していながら「世界を横目で見ながら開くオリンピックの開会式だ」ということを言いましたけれども、その辺りから政治がオリンピックに加わってきましたわ。映像としての問題はさておいても、そこにいろんな話があり

ました。スポーツというものが経済にも繋がり、政治にも繋がり、国際問題にも繋がり、そしてそれは人々の興味というか関心度というものに繋がっていきますね。

そして1976年のモントリオールオリンピック。そして1980年のモスクワオリンピック。モスクワオリンピックには日本は参加しませんでした。貧乏くじを引いたのがテレビ朝日だったんですが、そのことから独占というものがなくなりました。雨降って地固まると言いますか、それからNHKと民放はまた表面上は仲良くなりました。アナウンサー同志は割合と仲いいんですね。

つぎに1984年ロサンゼルスオリンピックの時に立候補地が世界で1つしかロサンゼルスしかなかったんですよ。他はもうやれなかったんです。オリンピックって。モントリオールというのは今でもまだ赤字で苦しんでる。オリンピックの最大の危機がきた。その時にロスアンゼルスが税金使わないでオリンピックをやると市長が約束した。じゃあ、なんでやるんだ。そこでスポンサーを集めなくてはできないんだぞということで、揺さぶりをかけたんですね。そしてIOCの会長が1984年の冬から今のサマランチさんだったんです。ラテン系の人やるとスポーツの運営というのはうまくいくんですよ。サッカーのアベランジェ。陸上のネビオロ。オリンピックではサマランチ、スペイン。ネビオロさんイタリア。ラテン系の人やると運営うまくいくんです。商売がうまいんです。それからだいたいアバウトなところがありますから、会計はあまり厳しくやらない方がスムーズにいくんですね。要するにそれだけ規模が大きいってことです。そして前からの因習ってものにあまりこだわらないでやっている。解釈はいろいろありますが、1984年のロサンゼルスオリンピックでスポンサー制度がでたんです。要するにスポンサーはどんどん参加することができる。しかし会場にはマクドナルドとは出ませんよ。ネスカフェとはきませんよ。しかしそれが全部スポンサーとしてオリンピックの商標権を持つんです。だからコカ・コーラは「コカ・コーラはオリンピックに協力してます」という言い方ができるわけです。ところがなぜコカ・コーラがそれを取りたがったかという、コカ・コーラが取らなきゃペプシが取るわけですよ。そういう競い合う経済の状態じゃなくてはこれは成り立たない。そこで1984年は凄いい黒字になったんです。

とにかく放送権料というのを高くしまして、当時レ

イトが違いますが250億円くらいの放送権料になりましたね。これはアメリカの放送局の放送権料です。それまではモスクワの時には日本が30億でどうのこうのと。アメリカの契約などを全部合わせたって100億程度だったのが一挙に高くなって、そして300億近くくらい黒字になったんですね。オリンピックで黒字になるなんて考えられなかった。そして、それがやがて1988年のソウルに繋がる大きな問題なんです。ソウルオリンピックの放送権料はアメリカの放送局は400億円です。そして同じ年の冬のカルガリー。カナダのカルガリーの放送権料400億円です。結局、夏のオリンピックは倍にはならなかったけれども冬のオリンピックは8倍になってしまった。なんでそんなに冬が高くなったか。これは時差がないからです。カナダのカルガリーの時差はセントラル地域になりますかね。まだ米ソ冷戦の頃、ソビエトとアメリカ、ソビエトとカナダの戦うアイスホッケーをライブでニューヨークで見られるということは、それだけの価値があったわけです。そしてアメリカ人の大好きなフィギュアスケートをライブで見られる。

一方、ソウルは、ベン・ジョンソンとカール・ルイスの100mの決勝というの、午後1時半からだったんです。陸上関係の方もいらっしゃると思いますが、たいがい1次予選2次予選とやって、別の日に準決勝をやって夕闇迫るオリンピックスタジアムでメインイベントとして100mの決勝をやるんですよ。ところが準決勝は前の日にやって、さあこれからいよいよ盛り上がるかって言うところから先は「ハイ明日」。ですから、9回の裏同点に追いついたジャイアンツの高橋由伸がバッターボックスに入ったら「ここから先は、明日の10時から」てなもんですよ。これはなぜか。全部アメリカの夜に合わせているからなんです。だから午後1時半からやるんですよ。これは400億円。カルガリーはライブだから400億円。さあ、ここで冬と夏は全く同じものになってしまった。これがサマランチをえらい刺激しまして、オリンピックの形式が変わってしまったんです。これは映像が変えたと言っていいんです。と言いますのはアメリカの3大ネットワークというのは夏のオリンピックを先に契約するんです。ということは400億円になった場合に、夏を1つ400億円で契約して500億円稼げばいいってもんじゃありませんね。これは放送権料だけです。制作費、派遣費、いろいろなものを考えたら少なくとも2,000億円

は稼がなくてはいけない。そうすると夏、1,000億円のスポンサーを集めなくてはいけない。そうなったら、冬は手を上げないですよ、もう。それは大仕事だから。3大ネットワークが競ってるから、オリンピックの契約料というのは上がっていくのに、1つが「僕やめた」で乗って来なくなったら大変です。だから分けてしまったんです。何を分けたか。夏と冬を2年おきに変えていったんです。4年に1回。オリンピックの年はうろう年で、アメリカ大統領選挙。大統領選挙があったからこそ、モスクワオリンピックの時はアメリカがボイコットしたいろいろな問題があった。そして4年に1回といのはオリンピックは古代の太陽暦だのなんのといっていたのが、急に2年に1回でよくなっちゃって太陽暦が変わったという話は聞いたことが無い(笑)。これ全部テレビが変えていっちゃったわけです。これで長野が98年、去年行われたわけです。本来なら今年ですがどこかでずらさなくてはならないということで、アルベールビルするとき、92年にやった後に、94年に次のクレハンメル大会をやっちゃったんです。そしてそれから4年経ってから長野をやったわけです。これが日本のジャンプの複合の団体にはラッキーだったんですね。両方で金メダルが取れた。

時差が大きなポイントになる

大事なことは時差ということですね。これが来年のシドニーには大きなポイントになってきますね。時差は1時間です。皆さんご存知のように、ところがシドニーは、サマータイムを採用しました。私はこの冬、シドニーへ行きましたけれども、まさかサマータイムとは思っていませんでした。だって日本の9月15日ということは3月15日ですからね。3月からサマータイムをとるとするのは、これは何故かと言ったらアメリカに時間を合わせたいのです、少しでも。それも自治体と言いましょか、地方自治の行き届いている国なものですからシドニーのニューサウスウェルズ州ですか、あそこだけがサマータイムです。ですから、日本人がよく行くブリスベンだとかは違うんです。だからサッカーの試合なんか大変ですよ、いろんな所でやりますから。時差のある所と無い所とでやってるわけですから。トータル2時間向こうが早いということは、要するに夜9時になったらオリンピック放送は終わっちゃうんですよ。9月15日ということは、今年の平均気温を見ていきますと最高気温25度。最低12度。

平均18度。ということは日本でいうならこれゴールデンウィークです。4月の末から5月の初め。一番いい時ですね。だからマラソンは昼間走れるんです。見てごらんささい、アトランタ、バルセロナ。もう朝早くから走ったり、そうやってバランスとってましたね、皆あの夏の暑い時ですから。ようやくこれで普通の時にスポーツをやる時間帯にやる。ということはその時間帯に見られるということですから、バルセロナとアトランタと違って今度の場合は「昨日オリンピック見ちゃったんで、ちょっと遅刻しました」というわけにはいかないんですよ。これは非常に見る方では楽ですね。見る方では楽ですが、見る方だけが楽じゃないんです。もっと楽なものがあるんです。いい事があるんですね。

これは9月の26日に、キューバのロドリゲスというスポーツ大臣が日本に来たんです。たまたま日本記者クラブには運動は関係無くて、経済、社会、政治とかしかなくて、たまたま私が解説委員時代からそこへ入っているものですから、会見へ行きましたら普通ですといっぱい記者が来るんですが、キューバのスポーツ相ですと、政治の記者や経済の記者というのはあまり関係無いものですから数が少ない。そこで「西田さん、後でメモを書いてください」と言われたものですから、私はもう聞かなくちゃいけないものですから、前から3番目ぐらいの所へ座った。私の前は誰もいない。後で調べたら、後ろに31人いたという話を聞いたんですが、私は後ろに5~6人しかいないんだと思ってました。彼はいろんな話をした。それで話をした時に、ロドリゲス・スポーツ相が「来年のオリンピックの始まる前に8月中旬から8月の末にかけて日本で合宿をしたい」と言いだしたんですね。狙いは明らかにジャパンマネーですよ。こういうものはすぐわかるんだけど、私はあえて、「8月の下旬から9月の始めというのは、凄く暑いんだ。この暑い所へ来て、気候のいいシドニーへ南へ下がって行くわけですから。それはメリットがあるのか」と聞いた。そうしたら「暑いのはキューバで慣れている」。確かにそうですね。でもそれよりも大事な事は時差だと言うんですね。「なるほどなあー」と思いました。もう今暑い所、寒い所というものに対する身体の慣れはありますけども、それ以上に時差が大事なんですね。

いろいろなものを調べてみると、陸上も9月9日にスーパー陸上というのがあるんですね。横浜がお引き

受けするんですが。9月9日にやるのに、かなり多くの人が参加するというんですね。9月11日までオリンピックの標準記録の期間に入りますから。その利点もあるんですが、どうしてこんなに選手が来るのかなと思いましたが、時差ですねやっぱり。

それで元を考えていきますと、1952年に初めてフィンランドのヘルシンキの大会に日本が戦後初めて参加しました。その時に取ったメダルは金1つを入れて全部合わせて8個か9個です。その4年後。1956年にメルボルン。オーストラリアでして、私は学生時代でしたのでよく放送を聞きました。日本の取った金メダルは4個。そして金・銀・銅、全部合わせた数が19個で倍増なんですね。戦後、日本はスポーツが復興してると言いましたが世界は戦後ですからね、時期は。日本が復興してると言ったって、その間の4年間のステップというのはギューンと上がっているわけですよ。各国ともスポーツは上がっている。なんで上がったかという、当時は日本のスポーツの力が復興してるということがありましたが、時差というものも大きく影響してるんじゃないかと私は9月26日の会見以来気が付くようになって、いろいろなものを調べ始めているわけです。これは今度のオリンピックの日本が、いろいろな面でプラスになるものが凄くあるんじゃないかと。そういうものを考えますね。

映像を作る世界のプロ

映像という話にまた戻ってきますが、シドニーオリンピックというのは映像を作るのはシドニーのABC放送局です。今度は世界に出す映像を作る。しかし長野オリンピックのような時には、ボブスレーなんてのは日本の放送局ではカメラマンは、どのようにとるのがあまり知らないわけですよ。もうこれはスピードのレースをやっているところだとか、イギリスに来てもらったり、世界中いろんな所から来る。アイスホッケーなんかはカナダの放送局です。打ち合わせの時にアイスホッケーは「日本のカメラマンが造った映像ならいい」ということさえ言ったんです。動きはついていけるだろうけど、次のことは読めないわけですよ。そうなってくると今度は映像を作る方も、世界のプロが来るわけです。

そしてシドニーオリンピックはNHKと民放と組んで、ジャパンコンソーシアム、JCが契約をしまして、145億円。アトランタオリンピックは当時円が

高かったものですから100億円くらいで済んだんですね。それから後、今度は145億円。そしてもう2008年までオリンピックの契約が済んでいるんです。どこで開くか。大阪が手を挙げてます、北京も手を挙げてますが、どこで開くかわからないオリンピックまで決まっているんです。これはサマランチの優れたところですね。契約があるということは、非常に有り難い事なんです。と言いますのは、もう2年後に迫っているワールドカップサッカーというのは放送権が決まってないんです。そしてあさって7日の晩、ワールドカップの予選抽選会というのが国際フォーラムであるんですね。東京は競技場を作っていないですしワールドカップやりませんから、抽選会だけが石原知事が一番かっこのいいところを見せられるシーンなんですね。これはもう非常に注目で、レズの小野がクジを引くんだそうです。可哀相に。J1にいる間にクジを引くんですが、あと小錦が引くんだそうですよ。あと一人は伊達公子さんかな。そういうふうないろいろな催物がある。

ところが映像を作るところが無いんです。NHKは作れないんですよ。放送権契約をやっていないから。放送権料はいくらだっていうと、540億円っていつてきたわけです。この間のフランス大会というのは、日本が払った放送権料は6億円なんです。90倍ですよ、いきなり。これは映像というものに対する一つの常識として持ってもらいたいのですが、ワールドカップをFIFAのアベランジェというブラジル人の会長は「サッカーというのは貧しい国でもやっているんだ。貧しい人間でもできるんだ」(サッカーをやっている人間が貧しいと言っているわけではないんですよ)。「だからワールドカップは全員で楽しんでもらう。その為にはペイテレビではいかん。公共放送で、安く放送が提供できる所にやらせよう」という。ここがNHKがワールドカップをできる基なんですね。ですから3つの大会で、世界から300億円という。サッカー関係者は「あれ程馬鹿な契約はない」と言いますが、でも。ですから1つの大会が100億円なんです。ヨーロッパ4。南米含めて4。アジア2。アジアは低いということだったんで、だいたい20億。そしてそのうちNHKが3分の1持つんですね。いろいろなものを含めると6億強ですね。それであのフランス大会は放送できた。ところが、今度は会長も代わったせいもありましてFIFAが1,250億円でキルビという放送代理店に売ってしまったんです。1,250億円ですよ。それが3年位前に買った

ちゃったんですね。私はニュース解説で「これから先、ワールドカップどうなるんだ。要するに共同開催というのはわかったけどどうなるんだ」という話をしましたけども、これは共同開催だからそんなに高くなったんです。日本がこれだけの事を言えば、韓国がこれだけの事を言うだろう。両方に競わせようという気持ちがあったんですね。そしてその1,250億円の内、日本に対して交渉で出してきたのが540億円。そしてケンカ別れしたというんですね。それから後、300億円に下がったという話。バナナ売ってるんじゃないんだから、そう安くされても困るんですが(笑)。そうなるとうまくしたもので、その中で民放が単独に動き始めたとか、そういう疑心暗鬼なニュースになるわけですよ。300億円で買えるわけじゃないですよ。日本の試合といたって3つしかないんですから。あっ、もっとそれから先あるという人もいるかもしれませんが…。まず普通考えて3つですね。あと決勝戦ぐらいを考えたなら4つを300億円といたら、1試合100億円ですらなくちゃいけませんよ、これ。そういった計算になってしまう。300億円となりましたけれども、民放が動いたのはそうではなくて、2001年の1月にKリーグとJリーグと一緒にイタリアのチームと試合をするという、この独占契約を結ぼうとしたんです。それはそうなったんですが、日本の今の経済力といましようか、テレビ放送業界にそういう力は無いですね。ではどうするか。結局放送権が無いですから、予選抽選会の映像が無いんです。アナウンサーのIDカード1枚3万円というんですから。

結局NHKも放送することになって、午後7時から放送します、生で。しかし3万円が惜しかったわけではないでしょうが、取材に行くアナウンサーに聞きましたら「放送センターの中のブースで、映像を見て喋る」ということでしたね。「節約になったね」と冗談を言ったんですが。しかしこんな歪んだ形でスタートしていくわけです。これはスポーツの中継の映像的な問題を超越して、制作とかそういったものがどんどん形が代わって行ってしまったんですね。

スポーツ放送から出てくる深みのある言葉

そういった点でも、スポーツの放送というものが既にもう経済なっていう一つのルールのあるものじゃなくて、商売に集約されるようになってしまいましたね。国際的なものに視野が開かれていけば、ワールドカッ

プ全体を見ようとなってきましたが、たぶん日本の試合だけだから、最初のところに戻るんですね。もうバレーボールのように日本が相手でない知らない、わからない。だから一番大事なキューバとロシアの試合だとか、ロシアとアメリカの試合を見た人はいないんですよ。ここに日本のスポーツを伝える映像の問題と、その映像を見てスポーツを知る人の問題が出てくるわけですよ。ですからスポーツというものが常に日本を通したものに限られてしまう。確かにどこかひいきを持った方がいい。いろいろな中で相撲なんかでも「あー、魁皇が好きだ。魁皇が好きだ」って思って相撲見ると少し面白い。「あー、右上手ってというのは始めから掴ましてやってくれないか」とか「最初から四つになってやったらあいつは横綱だ」とか相撲の理解というのが深まってくる。でも国際的なスポーツを見るとき伝える方のあり方というものが、いわゆるレジャーとして見るか、或いはスポーツとして見るか、そこに歪みというものが当然できてきてしまうんですね。これはスポーツ放送の非常に大事なことだと思うんですね。そしてスポーツ放送には、そこにあるスポーツだけを求めないでほしい。私はスポーツ選手の言葉というのは大好きなんですが、そこを見てほしい。そしてそれを皆が聞いてほしい。

例えばあのアトランタのオリンピックの時に、有森さんの「自分で自分を褒めたいと思います」という言葉はどうやって出てきたか。あれ私はインタビューを見ていました。私はオリンピックというのは、アトランタのオリンピックというのは初めてテレビで見たいんです。それまで全部現地に行ったり、キャスターやったりしてましたから、オリンピックを自分の家で見たいのはアトランタが初めてです。その時に、有森さんに藤井君というアナウンサーが聞いた。「この前の銀メダルも素晴らしかったけども、今度のメダルはもっと意味があると思うんですよ。どうでしょうか」と聞いたんですね。そうしたら彼女が「メダルの色は銅かもしれないですけど」と言ったんです。インタビューの最初にエクスキューズで始まるインタビューは無いんですね。メダルの色は銅かもしれないけどということは、4年前に銀メダルを取った人は今度何を求められるかという、銅ではありませんね。金ですね。そこで彼女は「メダルの色は銅かもしれないですけど」と言った。「後であの時何で頑張らなかつたんだらうかと思うレースはしたくないし、今回はしてませんし」と言ったん

ですね。これはどういうことかと言うと、後である時頑張らなかつたんだろうかというレースというのは、彼女が32kmでスパートしたことです。20kmでロバに置いて行かれましたね。テレビ朝日の宮島さんは放送の中でロバの年齢が17才だったのが32才になって、急に老けちゃったなと思いましたらまた20才に戻ったり。それ程ロバは無名だったわけですね。そのロバに置いて行かれてしまった。しかし彼女は32kmでスパートした。その時に隣に走っているのはエゴロワでした。あのバルセロナオリンピックで最後に置いて行かれたあのエゴロワを置いてスパートした。宮原さんは「エゴロワは追いつけないんじゃないんです。追いつけられないんです」といって答えた。私はそうだと思ってましたね。しかし40kmで逆転されましたね。ロバには勝てなくても、ジッとあそこで32kmで我慢してれば勝つたという人は必ずいるんですよ。その時に彼女は「後である時何で頑張らなかつたんだろうかというレースはしたくない」ということは、あの最後のバネは4年前と変わってないわけですから、彼女はあそこで10kmかけてスパートしなかつたら、エゴロワは抜けないわけですよ。そこで彼女はスパートした。そして40kmで抜かれた。ですからあの時「何で頑張らなかつたんだろうかというレースはしたくないし、今回はそういうレースはしてませんし」と言ってますね。これは見事な自己主張ですね。そして初めて「自分で自分を褒めたいと思います」と言いましたね。これは流行語大賞を貰いました。一緒に貰った言葉が“メイクドラマ”という比較的思いつきの言葉なものですから（笑）、有森さんの言葉も同時に軽く思われていますが私は素晴らしい言葉だと思います。この放送を見てる人がどう感じたか。その真ん中の部分は非常に難しい。ややこしい。でもその言葉だけを見るとということよりも、あの時の聞く人間の言葉ですよ。「メダルの色は銅かもしれませんけど」と言った時に、有森さんは喋り方で息をつくんですね。それが一つの魅力でもあるんです。肺活

量があんまり無いんじゃないかと思うぐらい抑えてる。その時にもし、聞き手が相手の話を聞こうとしなかつたら「いや、そんなことありませんよ。立派ですよ」と言ってしまったでしょうし、「後である時頑張らなかつたんだろうかというレースはしたくないし」という時に「そんなことありませんよ」とすぐ言ってしまおうでしょうし。「初めて自分で自分を褒めたいと思います」という言葉の前でもあの時に何か言ってしまったらそれはなかつたと思う。

私は実は『話し上手は聞き上手』という、スポーツのいろんな所で聞いたことをこの本に書きまして、日本へ有森さんが来られた時に一緒にチビリンピックのプレゼンターとして2人で賞を渡すんですが、彼女が午後休憩している時に「これ、帰りの飛行機の中でも読んでくれ」って渡したら、彼女がそれを休憩時間に読んでくれたんですね。「あの言葉は用意していた言葉ではないんだ」という。「藤井さんに引張り出されたんですよ」と、こう言った。要するに「藤井さんはあんまり聞かないんですよ」と僕に話をしましたね。ということは、インタビューというのは言葉で繋ぐんじゃないんですね。やっぱり聞くんですね。これは素晴らしいインタビューをされた人間の言葉だと思いましたね。これは素晴らしいことでしたね。これは、スポーツ放送の一つの映像の中から出て来る、そういった深みのある言葉。人間が出て来る。これがスポーツの放送というのは勝った負けたじゃなくて、そこにあるもの、回りのものが伝わってこそ文化だと思うんですね。それをこれから先の映像という中で、この深さというものをどれだけ出せるか。それには日本の今の映像の作り方、あるいは放送の姿勢というのは相当直していかないと国際試合は伝えられてもスポーツそのものが伝える本質が遠のいてしまうんじゃないかと思います。

お約束の時間になりました。どうも有り難うございました。